

堀内家長生庵における動線経路樹を用いた露地空間の分析

八代研究室

00312022 本間 健太郎

1. はじめに

京都市中央区にある堀内家は、初代堀内仙鶴(1675～1748)以来、12代にわたって表千家の脇宗匠をつとめる由緒ある家柄で、現存する茶室は宝永5年(1864)の大火後、旧規により創建当初とほぼ同様に再建されたと伝えられる。本研究は、堀内家長生庵を事例として、茶事空間の中での実際の人の動きに着目し、その経路と空間との関係を動線経路樹を用いて考察することを目的とする。本稿ではとくに「道すがら」と形容される堀内家長生庵における客人の動線について分析するとともに、動線経路樹の作成方法についても再検討した。

2. 平面構成と移動経路

長生庵は、図1に示すように約300㎡の敷地の中に半桂(二畳)・長生庵(二畳台目)・無着軒(八畳広間)の3席の茶室と外・内の露地が巧妙に配され、客人は図2に示すような経路でそれぞれの茶室へと導かれる。3席への経路は、まず釜座通から門屋を抜けて邸内に入り、さらに外露地に入って袴着で身支度を整え腰掛に移動する。実際の茶事がここから開始される。長生庵と無着軒についてはその後さらに中門(長生庵では梅軒門と称す)をくぐり内露地を経由して茶室に至る。

3. 動線経路樹の作成方法

堀内家宗匠へのヒアリングをもとに亭主と客人の動線を精査し、各茶室への経路図を作成した。図3は長生庵の事例で、亭主は△仏間、客人は▲門屋を起点とする。次に平面図から経路を取り出し、図4の方法で移動距離と曲折状況を示す動線経路樹を作成する。これによって曲折については回数・方向に加え新たに曲折角度を併示することができる。



図1 長生庵平面構成

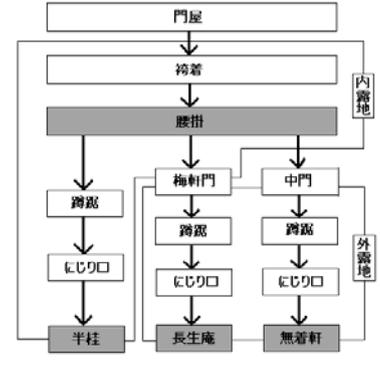


図2 動線経路と露地の関係

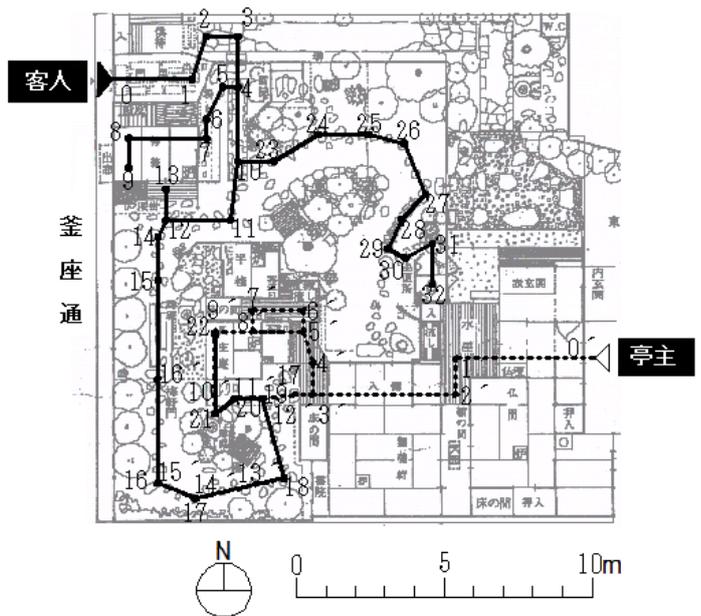


図3 長生庵動線経路

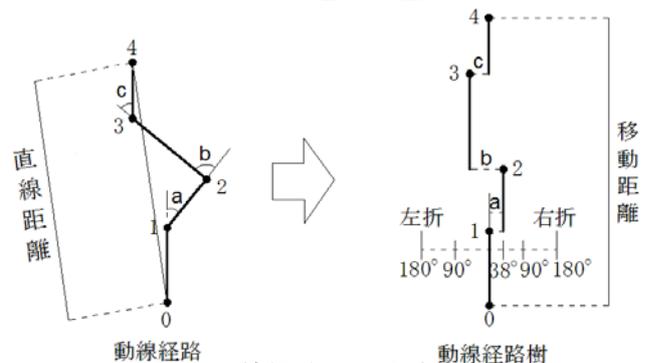


図4 動線経路樹の作成方法

4. 動線経路樹の分析

図5に、亭主と客人の動線経路樹を示す。客人の移動距離の最長は長生庵 34m、最短は半桂の 21m であるが、図中下の袴着への往復(6m×2)や腰掛付近での経路の重複(3m×2)を勘案すればそれぞれ 52m、39mにも及ぶ。長生庵については敷地と同面積の正方形(一辺 17m)の3辺分を移動することになる。

次に、腰掛け付近での経路の重複を勘案し、図6に客人の動線経路樹と露地との関係を示す。長生庵と無着軒の全移動距離は37m前後でほぼ等しいが、前者の内露地は後者の約3倍近くあり、意匠的に趣向を凝らしていることがうかがわれる。

図7と図8で、曲折数とそれぞれ移動距離および曲折角度との関係をみると、各茶室までの合計曲折数は、最高19回、最低12回と、茶室に着くまでに10回以上曲折しており、その角度の合計は、半桂の左折を除いて全て360°すなわち1回転以上している。さらに図9に腰掛一にじり口間の直線距離と移動距離の関係を示し、このうち長生庵については調査に同行した学生7名に移動距離の感覚量をプロットした。長生庵は直線距離の3倍もの距離を移動しており、感覚量では距離12m-30mと大幅に分かれた。大きなばらつきがあることから、狭小な露地空間での迷路性や道すがらのストーリー性を感じる。

5. まとめ

露地空間における客人の動線経路は、短い直線距離に曲折数を多くする事によって、露地を広く錯覚させ迷路性や道すがらのストーリー性も感じさせた。

【参考文献】「堀内家長生庵における動線経路主樹を用いた空間分析」

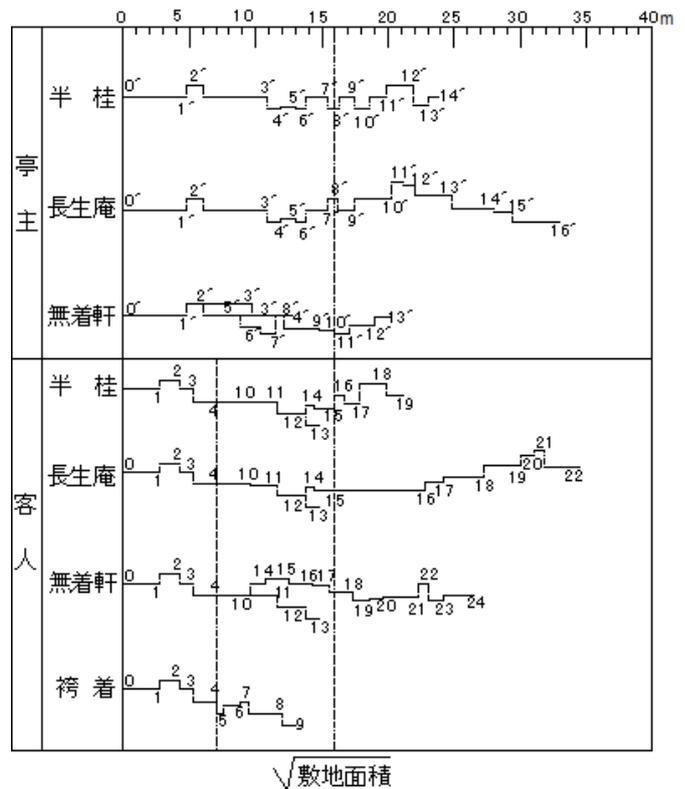


図5 亭主と客人の動線経路樹

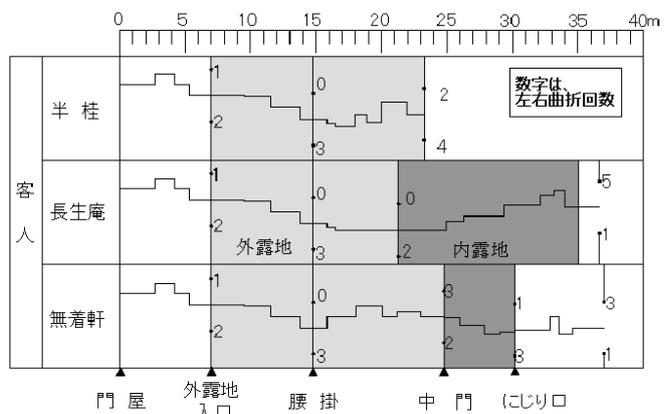


図6 客人動線経路樹と露地との関係

2005年度 橋本高志 卒業論文

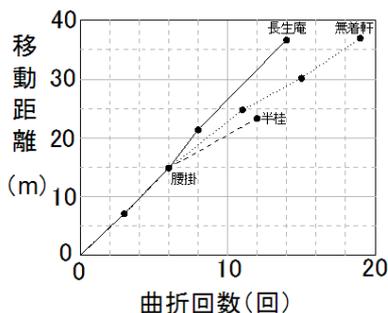


図7 曲折回数と移動距離

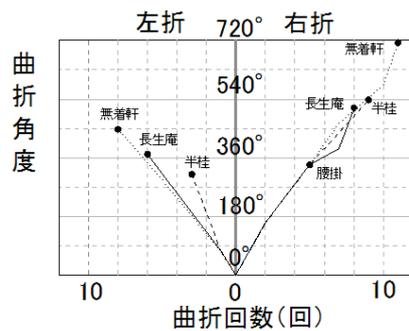


図8 左右曲折回数と移動距離

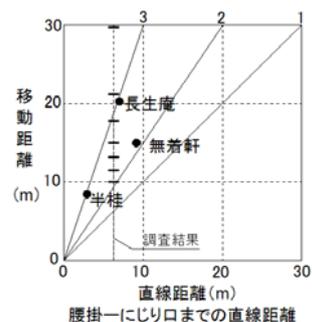


図9 直線距離と移動距離の関係